

瓜の涙

泉鏡花

青空文庫

年紀は少いの、よつぽど好きだと見えて、さもおいしそうに煙草を喫みつつ、……し

かし烈しい暑さに弱つて、身も疲れた様子で、炎天の並木の下に憩んでいる学生がある。

まだ二十歳そこらであろう、久留米餅の、紺の濃く綺麗な処は初々しい。けれども、

着がえのなさか、幾度も水を潜つたらしく、肘、背筋、折りがみのあたりは、さらぬだ

に、あまり健康そうにはないのが、薄瘦せて見えるまで、その処々色が褪せて禿げてい

る。――茶の唐縮緬の帯、それよりも煙草に相応わないのは、東京のなにがし工業学校の

金色の徽章のついた制帽で、巻蓑ならまだしも、喫んでいるのが刻煙草である。

場所は、言つた通り、城下から海岸の港へ通る二里余りの並木の途中、ちようど真中

処に、昔から伝説を持った大な一面の石がある――義経記に、……

加賀国富樫と言う所も近くなり、富樫の介と申すは当国の大名なり、鎌倉殿より仰は

蒙らねども、内々用心して判官殿を待奉るとぞ聞えける。武蔵坊申しけるは、

君はこれより宮の越へ渡らせおわしませ――

とある……金石の港で、すなわち、旧の名宮の越である。

真偽のほどは知らないが、おなじ城下を東へ寄った隣国へ越る山の尾根の談義所村というのに、富樫があとを追つて、つくり山伏の一行に杯を勧めた時、武蔵坊が鳴るは滝の水、日は照れども絶えずと、謡つたと伝うる（鳴は滝）小さな滝の名所があるのに対して、これを義経の人待石と称うるのである。行歩健かに先立つて来たのが、あるき悩んだく我どのの姫君——北の方を、乳母の十郎権の頭が扶け参らせ、後れて来るのを、判官がこの石に憩つて待合せたというのである。目覚しい石である。夏草の茂つた中に、高さはただ草を抽いて二三尺ばかりだけれども、広さおよそ畳を数えて十五畳はあろう、深い割目が地の下に徹つて、もう一つ八畳ばかりなのと二枚ある。以前はこれが一面の目を驚かすものだったが、何の年かの大地震に、坤軸を覆して、左右へ裂けたのだそうである。またこの石を、城下のものは一口に呼んで巨石とも言う。

石の左右に、この松並木の中にも、形の丈の最も勝れた松が二株あって、海に寄つたのは亭々として雲を凌ぎ、町へ寄つたは拮据して、枝を低く、彼処に湧出づる清水に翳す。……

そこに、青き苔の滑かなる、石囲の掘抜を噴出づる水は、音に聞えて、氷のごと

く冷やかに潔い。人の知った名水で、並木の清水と言うのであるが、これは路傍みちばたに自かおのずら湧いて流るるのではなく、人が囲った持主があつて、清水茶屋と言う茶店が一軒、田畝たんぼの土手上に廂ひさしを構えた、本家は別の、出茶屋でちやだけれども、ちよつと見霽みはらしの座敷もある。あの低い松の枝の地紙形じがみなりに翳蔽さしおおえる葉の裏に、葦簀よしずを掛けて、掘抜に繞めぐらした中を、美しい清水は、松影に揺れ動いて、日盛ひさかりにも白銀しろがねの月影をこぼして溢あふるるのを、広い水槽でうけて、その中に、真桑瓜まくわうり、西瓜すいか、桃すもも、李ひやの実を冷して売る。……

名代なだいである。

二

畠はたけ一帯、真桑瓜が名産で、この水あるがためか、巨石おおいしの瓜は銀色だと言う……瓜畠はたがずつと続いて、やがて蓮池はすいけになる……それからは皆青田あおたで。

畑はたのは知らない。実際、水槽に浸したのは、真蒼まつさおな西瓜も、黄なる瓜も、颯さつと銀色の蓑みのを浴びる。あくどい李あかの紅いあかのさえ、淡くくるくると浅葱あさぎに舞う。水に迸ほとばしる勢いきおいに、水槽もりあがを装も上りあがつて、そこから百条の簾すだれを乱して、溝を走つて、路傍みちばたの草を、さらさらと鳴し

て行く。

音が通い、雫を帯びて、人待石——巨石の割目に茂った、露草の花、蓼の紅も、ここに腰掛けたという判官のその山伏の姿よりは、爽かに鎧うたる、色よき絨毛を思わせて、黄金の太刀も草摺も鳴るよ、とばかり、松の梢は颯々と、清水の音に通って涼しい。

けれども、涼しいのは松の下、分けて清水の、玉を鳴して流るる処ばかりであろう。

三間幅——並木の道は、真白にキラキラと太陽に光って、ごろた石は炎を噴く……両側の松は梢から、枝から、おのが影をおのが幹にのみ這わせつつ、真黒な蛇の形を畝す。

雲白く、秀でたる白根が岳の頂に、四時の雪はありながら、田は乾き、畠は割れつつ、瓜の畠の葉も赤い。来た処も、行く道も、露草は胡麻のように乾び、蓼の紅は蚯蚓が爛れたかと疑われる。

人の往来はバツタリない。

大空には、あたかもこの海の沖を通って、有磯海から親不知の浜を、五智の如来へ詣ずるという、泳ぐのに半身を波の上に顕して、列を造って行くとか聞く、海豚の群が、毒気を吐掛けたような入道雲の低いのが、むくむくと推並んで、動くともなしに、見て

いると、地が揺れるように、ぬツと動く。

見すばらしい、が、色の白い学生は、高い方の松の根に一人居た。

見ても、薄桃色に、また青く透明^{すきとお}る、冷い、甘い露の垂りそうな瓜に対して、もの欲^{ほし}

げに思われるのを恥じたのであろう。茶店にやや遠い人待石に――

で、その石には腰も掛けず、草に蹲^{うずくま}つて、そして妙な事をする。……煙草^{たばこ}を喫^のむのに、

燐寸^{マツチ}を摺^{すり}つた。が、燃さしの軸を、消えるのを待つて、もとの箱に入れて、袂^{たもと}に蔵^{しま}つた。

乏しい様子が、燐寸ばかりも、等閑^{なわざり}になし得ない道理は解^よめるが、焚^{もえ}残りの軸を何

にしよう……

蓋^{けだ}し、この年配^{とし}ごろの人数^{ひとかず}には漏れない、判官鼻^{ほうがんびい}貞^{いき}が、その古跡を、取散らすまい、

犯すまいとしたのであつた――

「この松の事だろうか……」

――金石^{かないわみなと}の湊^{みなと}、宮の腰の浜へ上つて、北海の鮎^{たこ}と烏賊^{いか}と蛤^{はまぐり}が、開帳まいりに、ここへ

出て来たという、滑稽^{おかし}な昔話がある――

人待石^{やす}に憩^{やす}んだ時、道中の慰みに、おのおの一芸^{つかまつ}を仕ろうと申合す。と、鮎^{たこ}が真前^{まっさき}に

ちよろちよろと松の木の天辺^{てっぺん}へ這^はつて、脚をぶらりと、

「藤の花とはどうだの、下り藤、上り藤。」と縮んだり伸びたり。

烏賊が枝へ上って、鰭を張った。

「印半纏 見てくんねえ。……鳶職のもの、鳶職のもの。」

そこで、蛤が貝を開いて、

「善光寺様、お開帳。」とこう言うのである。

鈍豆煙管を噛むように啣えながら、枝を透かして仰ぐと、雲の搦んだ暗い梢は、ちらちらと、今も紫の藤が咲くか、と見える。

三

「——あすこに鮓が居ます——」

とこの高松の梢に掛った藤の花を指して、連の職人が、いまのその話をした時は……

ちようど藤つつじの盛な頃を、父と一所に、大勢で、金石の海へ……船で鰯網を曳かせに行く途中であつた……

楽しかった……もうその茶店で、大人たちは一度吸筒を開いた。早や七年も前にな

る……梅雨晴の青い空を、流るる雲に乗るように、松並木の梢を縫って、すうすうと尾長鳥が飛んでいる。

長閑に、静な景色であつた。

と炎天に夢を見る様に、恍惚と松の梢に藤の紫を思つたのが、にわかに驚く！ その次なる烏賊の芸当。

鳶職というのを思うにつけ、学生のその迫つた眉はたちまち暗かつた。

松野謹三、渠は去年の秋、故郷の家が焼けたにより、東京の学校を中途にして歸つたまま、学資の出途に窮するため、拳を握り、足を爪立てているのである。

いや、ただ学資ばかりではない。……その日その日の米薪さえ覚束ない生活の悪処に臨んで、——実はこの日も、朝飯を済ましたばかりなのであつた。

全焼のあとで、父は煩つて世を去つた。——残つたのは七十に近い祖母と、十ウばかりの弟ばかり。

父は塗師職であつた。

黄金無垢の金具、高蒔絵の、貴重な仏壇の修復をするのに、家に預つてあつたのが火になつた。その償い的一端にさえ、あらゆる身上を煙にして、なお足りないくらいで、

焼あとには灰らしい灰も残らなかった。

貧乏寺の一間を借りて、墓の影法師のように日を送る。――

十日ばかり前である。

渠が寝られぬ短夜に……疲れて、寝忘れて遅く起きると、祖母の影が見えぬ……

枕頭の障子の陰に、朝の膳ごしらえが、ちゃんと出来ていたのを見て、水を浴びたように肝まで寒くした。――大川も堀も近い。……ついで愚痴などを言った事のない祖母

母だけれど、このごろの余りの事に、自分さえなかったら、木登りをして学問の思い

は届こうと、それを繰返していたのであるから。

幸に箸箱の下に紙切が見着かった――それに、仮名でほつほつと（あんじまいぞ。）

と書いてあった。

祖母は、その日もおなじほどの炎天を、草鞋穿で、松任という、三里隔った町ま

で、父が存生の時に工賃の貸がある骨董屋へ、勘定を取りに行つたのであった。

七十の老が、往復六里。……骨董屋は疾に夜遁げをしたとやらで、何の効もなく、日

暮方に帰ったが、町端まで戻ると、余りの暑さと疲労とで、目が眩んで、呼吸が切

れそうになった時、生玉子を一個買つて飲むと、蘇生った心地がした。……

「根氣の薬じや。」と、そんな活計の中から、朝ごとに玉子を割って、黄味も二つわけにして兄弟へ……

萎れた草に露である。

——今朝も、その慈愛の露を吸った勢で、謹三がここへ来たのは、金石の港に何某とて、器具商があつて、それにも工賃の貸がある……懸を乞ひに出たのであつた——
 若いものの癖として、出たとこ勝負の元氣に任せて、影も見ないで、日盛を、松並木の焦げるがとき中途に来た。

暑さに憩うだけだったら、清水にも瓜にも氣兼ねのある、茶店の近所でなくつても、求むれば、別なる松の下蔭もあつたろう。

渠はひもじい腹も、甘くなるまで、胸に秘めた思があつた。

判官の人待石。

それは、その思を籠むる、宮殿の大なる玉の床と言っても可からう。

四

金石街道の松並木、ちようどこの人待石から、城下の空を振向くと、陽春三四月の頃は、天の一方をぼつと染めて、銀河あまのがわの横たうごとき、一条ひとすじの雲ならぬ紅くれなゐの霞かかが懸る。…

遠山の桜に髣髴ほうふつたる色であるから、花の盛さかには相違ないが、野山にも、公園にも、数の植わった邸町やしきまちにも、土地一統が、桜の名所として知った場所に、その方角に当つては、一ひとところ所として空に映るまで花の多い処はない。……霞の滝、かくれ沼、浮城うきしろ、もなたりなたりの語を聞くのと違つて、現在、誰の目にも視みめらるる。

見えつつ、幻影まぼろしかと思えば、雲のたたずまい、日の加減で、その色の濃い事は、一いっつとと齊きに緋桃ひももが咲いたほどであるから、あるいは桃だろうとも言うのである。

紫の雲の、本願寺の屋の棟にかかるのは引接いんじやくの果報ある善男善女でないと拝まれな。が紅の霞はその時節にここを通る鰯いわしうり売さばうり 鯖さばうり 売さばうりも誰知らないものはない。

深秘な山には、谷を隔てて、見えつつ近づくべからざる巨木名花があると聞く。……いずれ、佐保姫たえの妙なる袖の影であらう。

花の蜃気楼しんきろうだ、海市かいしである……雲井桜と、その霞を称たえて、人待石に、氎せんを敷き、割わ籠りごを開いて、町から、特に見物が出るくらい。

けれども人々は、ただ雲を掴んで影を視めるばかりなのを……謹三は一人その花吹く天
 — 雲井桜を知っていた。

夢ではない。……得忘るまじく可懐しい。ただ思うにさえ、胸の時めく里である。

この年の春の末であつた。——

雀を見ても、燕を見ても、手を束ねて、寺に籠つてはいられない。その日の糧の不安さ
 に、はじめはただ町や辻をうろついて廻つたが、落穂のないのは知れているのに、磴音
 にも、けたたましく驚かさるるのは、草の鶉よりもお果敢ない。

詮方なさに信心をはじめた。世に人にたすけのない時、源氏も平家も、取継るのは
 神仏である。

世間は、春風に大きく暖く吹かる中を、一人陰になつて霜げながら、貧しい場末の町
 端から、山裾の浅い谿に、小流の畝々と、次第高に、何ヶ寺も皆日蓮宗の寺が
 続いて、天満宮、清正公、弁財天、鬼子母神、七面大明神、妙見宮、寺々に祭つ
 た神仏を、日課のごとく巡礼した。

「……御飯が食べられますように、……」

父が存生の頃は、毎年、正月の元日には雪の中を草鞋穿でそこに詣ずるのに供を

した。参詣さんけいが果てると雑煮を祝つて、すぐにお正月が来るのであつたが、これはいつまでも大晦日おおみそかで、餅どころか、袂たもとに、煎餅せんべいも、櫃かやの実もない。

ある一寺に北辰妙見宮のまします堂は、森々しんしんとした樹立こだちの中を、深く石段を上る高い処にある。

「ぼろきてほうこう。ぼろきてほうこう。」

昼も梟ふくろうが鳴交わした。

この寺の墓所はかしよに、京の友禪とか、江戸の俳優某なにかしとか、墓があるよし、人伝ひとづてに聞いたので、それを捜すともなしに、卵塔らんとうの中へ入った。

墓は皆暗かつた、土地は高いのに、じめじめと、落葉も払わず、苔こけは萍うきぐさのようであつた。ふと、生垣を覗いた明い綺麗のぞあかるな色がある。外の春日はるびが、麗うらうらかに垣の破目やれめへ映つて、娘が覗くように、千代紙で招くのは、菜の花に交る紫雲英まじげんげである。……

少年の臉まぶたは颯さつと血を潮さした。

袖さえ軽い羽かと思う、蝶に憑つかれたようになって、垣の破目をするりと抜けると、出た処の狭い路みちは、飛々とびとびの草鞋のあと、まばらの馬の沓くつの形かたを、そのまま印して、乱れた亀甲形きっこうがたに白く乾いた。それにも、人の往来ゆききの疎まばらなのが知れて、限なき日当りが寂寞ひっそりし

て、薄甘く暖い。

怪しき臭気、得ならぬものを蔽うた、藁も蓆も、早や路傍に露骨ながら、そこには董の濃いのが咲いて、淡いのが草まじりに、はらはらと数に乱れる。

馬の杳形の畠やや中窪なのが一面、青麦に菜を添え、紫雲英を畔に敷いている。：

：真向うは、この辺一帯に赤土山の兀げた中に、ひとり薄萌黄に包まれた、土佐絵に似た峰である。

と、この一廊の、徽章とも言つべく、峰の簪にも似て、あたかも紅玉を鏤めて陽炎の箔を置いた状に真紅に咲静まったのは、一株の桃であつた。

綺麗さも凄かつた。すらすらと呼吸をする、その陽炎にものを言つて、笑っているようである。

真赤な蛇が居ようも知れぬ。

が、渠の身にとつては、食に尽きて倒るるより、自然に死ぬなら、蛇に巻かれたのが本望であつたかも知れぬ。

袂に近い菜の花に、白い蝶が来て誘う。

ああ、いや、白い蛇であろう。

その桃に向つて、行きざまに、ふと見ると、墓地の上に、妙見宮の棟の見ゆる山へ続く森の裏は、山際から崖上を彩つて——はじめて知つた——一面の桜である。……人は知るまい……一面の桜である。

行くに従うて、路は、奥拡がりにぐるりと山の根を伝う。その袂にも桜が充ちた。

しばらく、青麦の畠になつて、紫雲英で輪取る。畔づたいに廻りながら、やがて端へ出て、横向に桃を見ると、その樹のあたりから路が坂に低くなる、両方は、飛々差覗く、小屋、藁屋を、屋根から埋むばかり底広がり奥を蔽うて、見尽されない桜であつた。

余りの思いがけなさに、渠は寂然たる春昼をただ一人、花に吸われて消えそうに立つた。

その日は、何事もなかつた——もとの墓地を抜けて歸つた——ものに憑かれたようになつて、夜はおなじ景色を夢に視た。夢には、桜は、しかし桃の梢に、妙見宮の棟下りに晃々と明星が輝いたのである。

翌日も、翌日も……行つてその三度の時、寺の垣を、例の人里へ出ると齊しく、桃の枝を黒髪に、花菜を棲にして立つた、世にも美しい娘を見た。

十六七の、瓜実顔の色の白いのが、おさげとかいう、うしろへさげ髪にした濃い艶の

ある房^{ふつさ}りした、その黒髪^{くろかみ}の鬢^{びん}が、わざとならずふっくりして、優しい眉^{まゆ}の、目の涼しい、引しめた唇^{くちびる}の、やや寂しいのが品^{しな}がよく、鼻筋^{はなすね}が忘れたように隆^{たか}い。

縞^{しま}目は、よく分らぬ、矢^や紺^{がに}ではあるまい、濃い藤色^{ふじいろ}の腰^{こし}に、赤い帯^{おビ}を胸^{むね}高^{たか}にした、とばかりで袖^{そで}を覚えぬ、筒袖^{つつそで}だったか、振袖^{ふりそで}だったか、ものに隠^{かく}れたのであろう。

真昼^{まひる}の緋桃^{ひもも}も、その娘^{むすめ}の姿^{すがた}に露^{つゆ}の濡色^{ぬしき}を見せて、髪^{かみ}にも、髻^{もどり}にも影^{かげ}さす中に、その瓜実^{うりじき}顔^{かお}を少^{すこ}し傾^{かた}けて、陽炎^{やぎら}を透^{とお}かして、峰^{みね}の松^{まつ}を仰^{あが}いでいた。

謹^{きん}三^{さん}は、ハツと後^{あと}退^{ずさ}りに退^{すさ}った。――杉垣^{すぎがき}の破目^{われめ}へ引込^{ひきこ}むのに、かさかさと帯^{おビ}の鳴^{なり}るのが浅間^{あさま}しかつたのである。

気咎^{きとが}めに、二日^{ふたにち}ばかり、手繰^{てまわ}り寄せらるる思^{おも}いをしながら、あえて行くのを憚^{はばか}ったが――
――また不思議^{ふしぎ}に北国^{ほくこく}にも日和^{ひより}が続^{つづ}いた――三日^{さんにち}めの同じ頃^{ころ}、魂^{たま}がふつと墓^{はか}を抜^ぬけて出^でると、向^{むか}うの桃^{もも}に影^{かげ}もない。……

勿^な体^{てい}なくも、路^{みち}々^{みち}拝^をんだ仏神^{ぶつじん}の御名^{みな}を忘^{わす}れようとした処^{ところ}へ――花^{はな}の梢^{しげ}が、低^ひく顰^{たなび}蹙^むく……藁^{わら}屋^やはずれに黒髪^{くろかみ}が見^みえ、すらりと肩^{かた}が浮^ういて、俯^{うつ}向^むいて出^でたその娘^{むすめ}が、桃^{もも}に立ちぎまに、目^めを涼^{すず}しく、と小^こ戻^{もどり}をしようとして、幹^みがくれに密^そと覗^{のぞ}いて、此方^{こなた}をば熟^{じつ}と視^みる時^{とき}、俯^{ふしめ}目^めになつた。

思わず、そのとき渠は蹲んだ、そして煙草を喫んだ形は、——ここに人待石の松蔭と同じである——

が、姿も見ないで、横を向きながら、二服とは喫みも得ないで、慌しげにまた立つと、精々落着いて其方に歩んだ。畠を、ややめぐり足に、近づいた時であつた。

娘が、柔順に尋常に会釈して、

「誰方?……」

と優しい声を聞いて、はつとした途端に、真上なる山懷から、頭へ浴びせて、大きな声で、

「何か、用か。」と喚いた。

「失礼!」

と言う、頸首を、空から天狗に引摺まるる心地がして、

「通道ではなかつたんですか、失礼しました、失礼でした。」

——それからは……寺までも行き得ない。

人は何とも言わば言え……

で渠かれに取つては、花のその一里ひとさとが、所謂いわゆる、雲井桜の仙境であつた。たとえば大空な
る紅くれなゐの霞に乗つて、あまつさえその美しいぬしを視みたのであるから。

町を行ゆくにも、氣の怯ひけるまで、郷里にうらぶれた渠が身に、——誰も知るまい、——
ただ一人、秘密の境を探り得たのは、潜ひそかにおおひに大なる誇りであつた。

が、ものの本うちの中に、同じような場面を読み、絵の面おもてに、そうした色彩に対しても、自
ら面おもての赤うなる年紀としである。

祖母としよりの傍そばでも、小さな弟と一所でも、胸に思ふのも憚はばられる。……寝て一人の時さえ、
夜着の袖を被かぶらなければ、心に描くのが後うしろ暗めい。……

——それを、この機会に、並木の松蔭に取出でて、深秘なるあが仏を、人待石ひそかに、密に
据えようとしたのである。

成りたけ、人勢ひとけに遠ざかつて、茶店に離れたのに不思議はあるまい。

その癖、傍はたで視みると、渠が目に彩り、心に映した——あの朧ろうたけた娘の姿を、そのまま
取出して、巨石おおいしの床に据えた処は、松並木へ店を開いて、藤娘の絵を売るか、普賢菩薩ふげんぼさつ

の勧進をするような光景であつた。

渠は、空に恍惚と瞳を据えた。が、余りに懂るる煩惱は、かえつて行澄ましたもののごとく、容も心も涼しそうで、紺緋さえ松葉の散つた墨染の法衣に見える。

時に、吸つたのが悪いように、煙を手で払つて、吠の煙草入を懷中へ蔵うと、静に身を起して立つたのは――更めて松の幹にも凭懸つて、縋つて、あせつて、煩えて、――ここから見ゆるという、花の雲井をいまはただ、蒼くも白くも、熟と城下の天の一方に眺めようとしたのであつた。

さりとて、人は、と更めて、清水の茶屋を、松の葉越に差窺うと、赤ちやけた、ばさらな銀杏返をぐたりと横に、框から縁台へ落掛るように浴衣の肩を見せて、障子の陰に女が転がる。

納戸へ通口らしい、浅間な柱に、肌襦袢ばかりを着た、胡麻塩頭の亭主が、売溜の錢箱の蓋を圧えぎまに、仰向けに凭れて、あんぐりと口を開けた。

瓜畑を見透しの縁――そこが座敷――に足を投出して、腹這いになつた男が一人、黄色な団扇で、耳も頭もかくしながら、土地の赤新聞というのを、鼻の下に敷いていたのが、と見る間に、二ツ三ツ団扇ばかり動いたと思えば、くるりと仰向けになつた胸が、臍まで

寛^{はだ}ける。

清水はひとり、松の翠^{みどり}に、水晶の鎧^{よろい}を揺^{ゆり}据^すえる。

蟬^{せみ}時^{しぐれ}雨が、ただ一つになつて聞えて、清水の上に、ジーンと響く。

渠^{なが}は心ゆくばかり城下を視^みめた。

遠^{おちこち}近^{こだち}の樹立も、森も、日盛^{ひさかり}に煙のごとく、重^{かさな}る屋根に山も低い。町はずれを、蒼^{あおぞ}

空へ突出た、青い薬^{やげん}研の底かと思^{おも}えるのに、きらきらと眩^{まばゆ}い水銀を湛^たえたのは湖の尖^{せん}端^{たん}である。

あのあたり、あの空……

と思^{おも}うのに——雲はなくて、蓮^{はすだ}田、水^{みづた}田、畠^{はたけ}を掛^かけて、むくむくと列を造る、あの雲の

峰^{みね}は、海から湧^わいて地平線上を押廻^{おしまわ}す。

冷^{つめた}い酢^すの香^かが芬^{ぶん}と立つと、瓜^{すもも}、李^{すもも}の躍^{はね}る底から、心^{こころ}太^おが三ツ四ツ、むくむくと泳^{およ}ぎ

出^です。

清水は、人の知らぬ、こんな時、一層高く潔く、且つ湧^わき、且つ迸^{ほとばし}るのであろう。

蒼^蒼蠅^{ぶん}がブーンと来た。

そこへ……

六

いかに、あの体^{てい}では、蝶^{てふ}よりも蠅^{たか}が集^{たか}ろう……さし捨^{すて}のおいらん草^{くさ}など塵^{ちり}塚^{づか}へ運^{はこ}ぶ途中^{ちゆうちゆう}に似た、いろいろな湯具^{ゆぐ}蹴^け出し。年増^{ねいしやう}まじりにあくどく化粧^{けわ}つた少^わい女^めが六七人、汗^{あせ}まみれになつて、ついそこへ、並木^{なみき}を来^きかかる。……

年増^{ねいしやう}分^{ぶん}が先^{まづ}へ立^たつたが、いずれも日蔭^{たよ}を便^{たよ}るので、振^よれた洗濯^{せんたく}もののようになつて、その濡^ぬれるほどの汗^{あせ}に、裾^{すそ}も振^ふりもよれよれになつて、妙^{たふ}に一列^{いつれつ}に列^{れつ}を造^{つく}つた体^{てい}は、率^{すゑ}いるものがある、一^{ひと}からげに、縄^な尻^{しり}でも取^とつていそいで、浅間^{せんげん}しいまであわれに見える。

故^{ゆゑ}あるかな、背後^{はいご}に迫^{せま}つて男^{おとこ}が二人。一人^{ひとり}の少^わい方^{かた}は、洋傘^{やうさん}を片手^{ひとて}に、片手^{ひとて}は、はたと扇子^{せんし}を使^{つか}い使^{つか}い来るが、扇子^{せんし}面^{めん}に広告^{こうこく}の描^えいてないのが可^お訝^{かし}いくらい、何^{なん}のためか知らず、絞^{しぼ}り帯^{おび}の背^せに漢竹^{かんちく}の節^{ふし}を詰^{しめ}めた、杖^{すてき}だか、鞭^{むち}だか、朱^{しゆ}の総^{ふさ}のついた奴^{やつ}をすくりと刺^さしている。

年^{とし}倍^{ばい}なる元^{もと}頭^{あたま}は、紐^{ひも}のついた大^{おお}な蝦蟇^{がま}口^{ぐち}を突^つ込んだ、布^ほ袋^{いばら}腹^{はら}に、褌^{ふんどし}のあからさまな前^{まへ}はだけで、土地^{ちど}で売^うる雪^{ゆき}を切^きつた水^{みづ}を、手^て拭^{ぬぐ}にくるんで南^{なん}瓜^{とうなす}かぶりに、頤^{あご}を締^{しめ}

めて、やっぱり洋傘こうもり、この大爺おおじいが殿しつぱらで。

「あらッ、水がある……」

と一人の女が金切声を揚げると、

「水がある！」

と言うなりに、こめかみの処へ頭痛膏ずつこうを貼はった顔を掉ふつて、年増が真先まっさきに飛込むと、たちまち、崩れたように列が乱れて、ばらばらと女連おんなれんが茶店へ駆寄る。

ちよつと立どまつて、大爺と口を利いた少いわかのが、続いて入りぎまに、

「じゃあ、何だぜ、お前さん方——ここで一休みするかわりに、湊みなとじゃあ、どこにも寄らねえで、すぐに、汽船だよ、船だよ。」

銀鎖を引張つて、パチンと言わせて、

「出帆に、もう、そんなに間もねえからな。」

「おお、暑い、暑い。」

「ああ暑い。」

もう飛ついて、茶碗やら柄杓ひしやくやら。諸膚もろはだを脱いだのもあれば、腋わきの下まで腕まくりするのがある。

年増のごときは、

「さあ、みずぎようずい水行水。」

と言うが早い、瓜の皮を剥くように、ずるりと縁台へ脱いで赤裸々。

黄色なはだ膚も、茶じみたのも、清水の色に皆白。

学生は面を背けた。が、年増に限らぬ……言合せたように皆頭痛膏を、こめかみへ。そ

の時、ぽかんと起きた、茶店の女のどろんとした顔にも、齊ひとしく即効紙がはつてある。

「食やるが可い。よく冷えてら。堪たまらねえや。だが、あれだよ、皆みんな、渡してある小遣こづかいで各

々持いめいもちだよ——西瓜すいかが好よかったらこみで行きねえ、中は赤いぜ、うけ合だ。……えへッへ

ッ。」

きやあらかきやあらと若い奴やつひぐらし、蝸の化けた声を出す。

「真桑、李かしを囓かじるなら、あとで塩湯を飲みなよ。——うんにや飲みなよ。大金のかかった

身体からだだ。」

と大爺は大王のごとく、真正面の框かまちに上胡坐あげあぐらになつて、ぎろぎろと膚はだをみまわす。

とその中を、すらりと抜けて、褌つまも包ましいが、ちらちらと小刻こきざみに、土手へ出て、巨

石おおいしの其方そなたの隅に、松の根に立った娘がある。……手にも掬むすばず、茶碗にも後おくれて、浸し

て吸ったかと思うばかり、白地の手拭の端を、蒼むようにちよつと啣くわえて悄しおれた。巢立の鶴の翼を傷いためて、雲井の空から落ちざまに、さながら、昼顔の花に縋すがつたようなのは、——島田髭しまだに結つて、二つばかり年は長たけたが、それだけになお女らしい影を籠こめ、色香を湛たたえ、情を含んだ、……浴衣は、しかし帯さえその時のをそのままで、見紛みまがう方なき、雲井桜の娘である。

七

——お前たち。渡した小遣こづかい。赤い西瓜。皆の身体からだ。大金——と渦のごとく繰返して、その娘のおなじように、おなじ空に、その時瞳をじつと据えたのを視みると、渠かれは、思わず身を震わした。

おもて面を背けて、港の方かたを、暗くなつた目に一目仰いだ時である。

「火事だ、」謹三はほとんど無意識に叫んだ。

「火事だ、火事です。」

と見る、偉大なる煙筒えんとつのごとき煙の柱が、群湧むらがりわいた、入道雲の頂へ、海ある空へ

真黒にすくと立つと、太陽を横に並木の正面、根を赫と赤く焼いた。

「火事——」と道の中へ衝と出た、人の飛ぶ足より疾く、黒煙は幅を拡げ、屏風を立てて、千仞の断崖を切立てたように聳つた。

「火事だぞ。」

「あら、大変。」

「大いよ！」

火事だ火事だと、男も女も口々に——

「やあ、馬鹿々々。何だ、そんな体で、引込まねえか、こら、引込まんか。」

と雲の峰の下に、膚脱、裸体の膨れた胸、大な乳、肥つた臀を、若い奴が、鞭を振つて追廻す——爪立つ、走る、緋の、白の、股、向脛を、刎上げ、薙伏せ、挫ぐばかりに狩立てる。

「きやッ。」

「わッ。」

と呼ぶ声、叫ぶ声、女どもの形は、黒い入道雲を泳ぐように立騒ぐ真上を、煙の柱は、じりじりと蔽い重る。……

畜生——修羅——何等の光景。

たちまち天に蔓^{はびこ}つて、あの湖の葉研の銀も真黒になったかと思うと、村人も、往來^{ゆきき}も、いつまたたく間か、どツと溜^{たま}つた。

謹三の袖に、ああ、娘が、引添う。……

あわれ、渠の胸には、清水がそのまま、血になって湧^わいて、涙を絞って流落ちた。
ばらばらばら！

火の粉かを見ると、こはいかに、大粒な雨が、一粒ずつ、粗^{あら}く、疎^{まばら}に、巨^{おお}石^{いし}の面^{おもて}にか
かって、ぱツと鼓^{たん}草^{ぽぼ}の花の散るように濡れたと思うと、松の梢^{こすえ}を虚空から、ひらひらと
降^ふつて、胸を掠^{かす}めて、ひらりと金^{こん}色^{じき}に翻^{ひら}つて落ちたのは鮒^{ふな}である。

「火事じゃあねえ、竜巻だ。」

「やあ、竜巻だ。」

「あれ。」

と口の裡^{うち}、呼吸^{いき}を引くように、胸の浪立った娘の手が、謹三の袂^{たもと}に縋^{すが}つて、

「可^こ恐^わい……」

「……………」

「どうしましょうねえ。」

と引いて縋る、柔い細い手を、謹三は思わず、しかと取った。

——いかになるべき人たちぞ…

大正九（一九二〇）年十月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年1月29日作成

2009年4月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

瓜の涙

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>